

大会プレ企画「対話型アセスメント DLA 実践ワークショップ」要旨

「外国人児童生徒のための JSL 対話型アセスメント DLA (Dialogic Language Assessment)」(文部科学省,2014)は、文化的言語的に多様な子ども (CLD 児) の日本語の「話す」「読む」「書く」「(教室談話を)聴く」力を、一対一の対話を通して測る支援つき評価法である。「話す」「書く」に関しては、母語の力も測定することが可能である。本ワークショップでは、実際に DLA を実施している映像を視聴しながら、「JSL 評価参照枠」に示された 6 つのステージの記述文に照らして、対象児の言語能力の測定を体験する。また、DLA 実施における評価者の支援 (スキュアフォルディング) と対象児の反応をもとに、評価後の効果的な指導・支援の方法についてディスカッションをしたい。「DLA 本冊」と「DLA 使い方映像マニュアル」に目を通した上での参加をお勧めする。

(<http://www.tufs.ac.jp/blog/ts/g/cemmer/dla.html> より入手可)

基調講演「多様な背景をもつ子どもの読み書き能力の発達」要旨

読み書きの力は、すべての教科学習の基盤となるという点で、子どもが身につける能力としてきわめて重要なものである。つまずきは学業不振や自尊感情の低下に直結するだけでなく、高等教育等への進学に当たって選択の幅を著しく狭め、社会的・経済的な将来の可能性を狭めることになる。そうした点から、子ども達に十分な読み書きの力をつけることは、学校教育の重要な課題であると言えよう。子ども達の生活環境の多様化に伴い、多様な背景をもつ子ども達が日本語の読み書きを学んでいる。その意味で、十全な日本語の読み書きの力を身につけることは、日本で育ち日本語を母語とする子ども達だけの課題ではない。本報告では、最初に日本語母語児の読み書きの発達について概説する。次に、外国にルーツのある子どもや海外補習校在籍児について、現在私たちが行っている研究の概要を報告する。そこから、学習言語、書き言葉とも呼ばれる読み書き能力とは具体的にどの様なものなのか、また、なぜ習得には時間がかかり、つまずく子どもが多いのか、さらに可能ならば、どの様な支援があり得るのか考えてみたい。

大会企画パネル

「文化的言語的に多様な子ども (CLD 児) の教育保障—誰もが当事者として関わるために—」要旨

多様な文化を尊重した活力ある共生社会の実現を目的とした「日本語教育推進法」が施行された。この法律では文化的言語的に多様な子ども (CLD 児) の母語の重要性に配慮した日本語教育を行うべきであると明記されているものの、学校づくりの具体的なイメージは見えてこない。例えば、多言語の母語話者教員が必要だとされているが、学校教育への参画の道筋の具体は示されていない。また、日本語学習支援の現場では、日本語話者が支援者で母語話者がそのサポーターという固定化された関係性がみられる。今後、CLD 児の周囲にいる一人ひとりが CLD 児の教育保障を担う「当事者」意識を持ち、誰もが学校教育に参加できる環境づくりへの変革が必要だと考える。

本パネルでは、多文化化の状況が異なる新潟県上越市、神奈川県秦野市、大阪府門真市における学校教育の取り組みから、新たな「共生」に向けた学校の在り方を模索する。

大会企画ワークショップ「リサーチメソッド—質的研究入門と SCAT 実習—」要旨

各種言語教育 SIG の昨年度の会合の際に、今後の活動希望を聞いたところ、リサーチメソッドの研修会の要請が多かった。その要望をうけて企画した 3 月の SCAT の学習会は新型コロナウイルスの感染予防のため流れたので、今回は、2 時間の枠を活用して、学習会で予定していた学習会のエッセンス部分を取りあげることにした。このワークショップは 3 部だてになっている。第 1 部では、質的研究をする目的と留意点を確認する。第 2 部では、質的研究の方法の中でも、インタビューや語りのデータであれば比較的初学者でもとつきやすく、データを丸ごと分析できる SCAT の分析方法を紹介する。第 3 部では本ワークショップのために収集した練習用データを用いて SCAT の分析をやってみる。ハンズオンでの練習のあと成果を発表しあい、分析方法の理解を深める。